



ASAGO CITY

いくの地域まちづくり計画

Ikuno area master plan

～ ロマンあふれ かがやくまち 生野 ～



2010年5月

いくの地域自治協議会



「いくの地域まちづくり計画」は、資源保護のため環境に優しいソイ（大豆油）インキで印刷しています。

● いくの地域まちづくり計画 目次 ●

第1部 基本計画

第1章 計画の目的と背景…………… 2ページ

- 1 まちづくり計画の目的
- 2 まちづくり計画の背景

第2章 まちづくりの理念…………… 4ページ

- 1 まちづくりの理念
- 2 まちづくりのキャッチフレーズ
- 3 目標・将来像
- 4 計画の実現に向けて

第2部 分野別計画

第1章 健康でふれあい、 ともに生きるまちづくり(健康・福祉) …………… 8ページ

- 1 地域の課題
- 2 目標・将来像
- 3 施策・事業

第2章 やさしさが集まるまちづくり (生涯学習・子育て支援・男女共同参画) ……………11ページ

- 1 地域の課題
- 2 目標・将来像
- 3 施策・事業

第3章 水と緑のきれいな 分水嶺のまちづくり(環境) ……13ページ

- 1 地域の課題
- 2 目標・将来像
- 3 施策・事業

第4章 「みんなおいで！」のまちづくり (地域活性化) …………… 16ページ

- 1 地域の課題
- 2 目標・将来像
- 3 施策・事業

第5章 あんぜん・あんしんなまちづくり (防犯・防災) …………… 18ページ

- 1 地域の課題
- 2 目標・将来像
- 3 施策・事業

第6章 計画の実現に向けて……………20ページ

参考資料など

- 策定経過……………21ページ
協力者等名簿
施策体系図



いくの地域まちづくり計画

Ikuno area master plan

～ロマンあふれ かがやくまち 生野～

発行：平成22年5月30日
企画・編集：いくの地域自治協議会
〒679-3301 朝来市生野町口銀谷594番地6
TEL&FAX 079-679-4502
Eメール ikuno-jichi@asago-net.jp
ホームページ <http://asago-net.jp/users/ikuno-jichi/>

第1部 基本計画

第1部 基本計画

第1章 計画の目的と背景

- 1 まちづくり計画の目的
- 2 まちづくり計画の背景

第2章 まちづくりの理念

- 1 まちづくりの理念
- 2 まちづくりのキャッチフレーズ
- 3 目標・将来像
- 4 計画の実現に向けて



第1章 計画の目的と背景

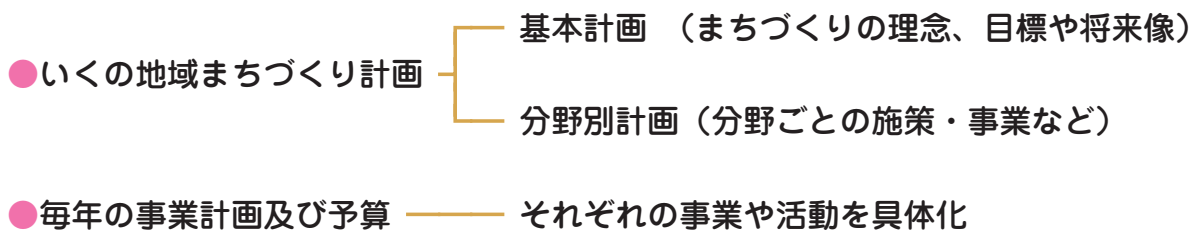
① まちづくり計画の目的

いくの地域自治協議会が策定する「まちづくり計画」は、私たち地域住民が主体となって行ういくの地域のまちづくりに向けた基本的な指針となるものであり、地域のまちづくりにかかる行動計画として位置づけられるものです。

本計画は、基本計画と分野別計画で構成されており、基本計画では基本となるべきまちづくりの理念と目標や将来像などを設定し、分野別計画ではそれぞれ課題と目標を設定するとともに施策・事業を設定するほか、計画実現に向けて心掛けるべき事項などを示しています。



口銀谷の風景



まちづくり計画の計画期間を概ね10年間に設定するとともに、約5年後には必要に応じて見直し作業を行うこととします。

また、具体的には毎年策定する各年度の事業計画及び予算において実施内容などを示していくこととします。

② まちづくり計画の背景



いくの地域は、朝来市生野町のうち口銀谷地域及び栃原地域などの範囲で、中国山地の中央部、市川及び円山川の分水嶺であり、地域の大半は山林で中心部に市街地や農地が広がっており、人口は3,337人、世帯数は1,226戸（平成22年3月末現在）で、14の行政区からなっています。

生野は古くから日本を代表する銀山の町として栄え、鉱山まち独特の歴史や文化を育み、豊かな暮らしが営まれてきました。昭和48年の閉山後も、企業や地域住民の努力により鉱工業のまちとして継続的に発展してきました。

平成7年頃から積極的に展開されてきた「住民と行政の協働のまちづくり」が定着している地域であり、様々なイベントが地域住民の連携によって展開されているほか、国特別天然記念

物オオサンショウウオが生息する豊かな自然環境の保全やきれいな川づくり、防犯まちづくりや自主防災などの活動が積極的に展開されています。

いくの地域自治協議会は、生野小学校及び平成17年4月に統合した旧栃原小学校（現生野小学校区）の校区をエリアとして設立した自治協議会で、生野メインホール内に事務局を設置しています。

このいくの地域では、平成17年4月に生野町が朝来市に合併したことなどを契機として、私たちをとりまく環境が大きく変化してきました。

朝来郡4町の合併によって事務事業が一本化し、生野支所機能が縮小したほか、奥銀谷及び栃原幼児センターや奥銀谷小学校の統合、生野町婦人会の解散などもありました。

また、2区茶畑地区では民間アパートが増加し若者の定住が見られますが、一方で景気の悪化などによって生野から撤退する企業が現れ、雇用環境が大きく変化するとともに、転勤等により従業員家族が転出するなど、ますます少子高齢化が深刻になっています。



倉谷川河川公園より 生野高原を望む

特に、中心部に形成された口銀谷の市街地と、平成17年に統合した旧栃原小学校区など周辺に広がる農村部とでは、地域の課題や目標、住民の考え方などが異なっており、それぞれの旧校区を越えた共通施策の展開や連携活動が課題となっています。

また、生野鉱山をはじめとする近代化遺産の評価が高まり、全国フォーラムや生野銀山開坑1200年事業などをはじめとするイベントが行われ、「鉱石の道プロジェクト」や「銀の馬車道プロジェクト」などと連携したシンボリックな交流事業として展開している「銀谷祭り」や「銀谷のひな祭り」をはじめとする町並みイベントが定着しています。この結果、町並み散策などで生野を訪れる観光客や交流人口が増加傾向にあり、さらに観光交流を推進するために、国土交通省のまちづくり交付金事業による甲社宅（5区）や旧浅田邸・旧吉川邸、生野駅西口周辺などの整備事業が朝来市によって進められています。

さらに、住民グループのまちづくり活動も積極的に展開されており、地域づくり生野塾の系譜を受



銀谷祭り

けた偕和倶楽部や、観光交流を主要テーマとしたNPO法人いくのライブミュージアムが設立したほか、口銀谷の町並みをつくる会や井筒屋運営委員会、いくの銀谷工房、生野もりあげ隊などが様々なイベント展開などの活動を推進しています。

このほか、まちづくり活動を支援する地域ファンドの性格を持つサポート組織として生野ひいきの会が設立し、まちづくり活動の財政支援などが行われており、各種団体がさらなる連携を図りながら、

いくの地域が目指すまちづくりの目標に向かって活動を展開していくことが重要であり、こうした活動をいくの地域の全住民が理解していくことが必要となっています。

また、社会全体でも分権型社会へ移行していくという大きな変化があり、「自分たちのまちは自分たちで汗を流して創る」「地域の課題を自分たちで解決する仕組みをつくる」という社会システムに移行し始めており、概ね小学校区を単位として設置されている地域自治協議会などは、こうした動きを受けたものと言えます。

このような様々な背景を受けて、いくの地域自治協議会としてまちづくりを計画的に進めていくために、まちづくり計画を策定することとしました。

第2章 まちづくりの理念

① まちづくりの理念

いくの地域において私たちが展開していくまちづくりに向けて、次の理念を設定しました。

・住民を大切にすまち

住民一人ひとりが、豊かで充実した暮らしを営み、生野に住んで良かったと思われるようなまちづくりを進めることが必要です。生野の風土や歴史・文化が育んだ人々の暮らしを見つめ直し、そこからまちづくりを考えていきます。

・地域の個性を大切にすまち

私たちのまちは、日本を代表する鉱山まちであるとともに分水嶺のまちなど、独特の個性を持っており、風土や歴史、伝統行事など地域の個性や生野らしさがあります。こうした個性を大切にしていくことによって、地域全体の個性と質を高めていくという視点を重視しました。



明治時代の生野鉱山本部

・住民参画によるまち

まちづくりは、住民一人ひとりの自主的な活動と、地域自治協議会や行政、企業などの協力のもとに地道につくり上げていくものです。



まちづくり計画策定特別部会

特に、住民参加による総合計画策定や地域づくり生野塾の展開、さらには生野町まちづくり基本条例の制定など、全国のモデルとなるような参画と協働のまちづくりが展開されてきた地域であることを踏まえ、住民の参画を得ながら策定したまちづくり計画の実現に向けては、住民の主体的な活動を大事にしたまちづくりを発展・継承していくこととしました。

・奥銀谷地域と連携したまち

いくの地域自治協議会は平成19年時点の生野小学校区を対象範囲としており、同じ生野町の奥銀谷地域は範囲には含まれていません。ところが実際には、自然環境や地域の歴史・文化などの多くを両地域が共有しており、これまでの防災や福祉、生涯学習や観光まちづくりなどのほとんどの活動が、長い間に渡って生野町全域を対象として行われてきました。

さらに平成21年4月に奥銀谷小学校と生野小学校とが統合し生野町全体が一校区となった状況な



生野踊り

ども踏まえ、今後の活動においては奥銀谷地域自治協議会と緊密な関係を構築し、ともに連携した生野町のまちづくりを展開していく必要があります。

今後は、将来的な地域の役割再編なども視野に入れながら、奥銀谷地域をはじめとして周辺地域などと相互に連携したなかでまちづくりを進めることを重視しました。

② まちづくりのキャッチフレーズ

私たちは、これからいくの地域で進めるまちづくりについて様々な議論を重ね、次のキャッチフレーズを設定し、まちづくりを進めていくこととしました。

～ ロマンあふれ かがやくまち 生野 ～

このキャッチフレーズには、「生野銀山の歴史ロマンや美しい自然のロマンに満ち、金や銀の輝きと同様に人々がいきいきと輝いて暮らすことができる生野をみんなでつくっていきましょう」という、私たち住民一人ひとりの思いが込められています。

③ 目標・将来像

私たちは、いくの地域のまちづくりを進めるにあたって、分野ごとに次の目標・将来像を設定しました。

健康でふれあい、ともに生きるまちづくり

地域福祉や支え合い・助け合いという言葉は、決して強制されるものではなく、地域住民一人ひとりの心が源となって広がっていくべきものです。目指す方向性は共有しながらも、一人ひとりが自らの目線で地域社会の一員として、楽しく、いきいきと、生きがいを持って暮らしていくことが大切です。



やさしさが集まるまちづくり



貴重な地域資源を有するまちに住んでいる私たちが学習して、地域の魅力を再認識し、次世代の子どもたちへ伝えていくことが求められています。さらに、地域で子どもたちを育み、安心して子育てのできる環境を創出するとともに、世代間交流を通じて、地域に誇りが持てるようにしていきます。

水と緑のきれいな分水嶺のまちづくり

市川などの美しい自然や鉱山まちとして、歴史・文化など生野の豊かな環境資源を地域住民の財産として次の世代に引き継いでいく暮らしを進めるとともに、いつまでも住み続けられるように潤いのある快適な環境をつくり上げていきます。



口銀谷の風景

「みんなおいで！」のまちづくり



銀谷祭り

住民団体などが、近代化遺産群や風情ある町並みなどの地域資源を活かした様々なイベントを展開しているなかで、いくの地域が目指すまちづくりの目標に向かって活動を継続・発展させていくために、各種団体との連携を図ることが重要であり、こうした活動をいくの地域の全住民が理解していく環境をつくり上げていきます。

あんぜん・あんしんなまちづくり

住民や地域が連携した活動を行い、犯罪の防止や災害などに備え、あんぜん・あんしんに暮し住み続けるまちをつくり上げていきます。



児童登校時の見守り

④ 計画の実現に向けて

このまちづくり計画は、多くの地域住民の参画を得て意見を集約させながら自らのルールとして策定しました。計画の実現に向けても、自分たちで確実に行動していくことによってより精度の高いまちづくりを進め、ロマンあふれかがやくまちを次世代へと引き継いでいきます。

第2部 分野別計画

第2部 分野別計画

第1章 健康でふれあい、 ともに生きるまちづくり(健康・福祉)

- 1 地域の課題
- 2 目標・将来像
- 3 施策・事業

第2章 やさしさが集まるまちづくり (生涯学習・子育て支援・男女共同参画)

- 1 地域の課題
- 2 目標・将来像
- 3 施策・事業

第3章 水と緑のきれいな 分水嶺のまちづくり(環境)

- 1 地域の課題
- 2 目標・将来像
- 3 施策・事業

第4章 「みんなおいで！」のまちづくり (地域活性化)

- 1 地域の課題
- 2 目標・将来像
- 3 施策・事業

第5章 あんぜん・あんしんなまちづくり (防犯・防災)

- 1 地域の課題
- 2 目標・将来像
- 3 施策・事業

第6章 計画の実現に向けて



第1章 健康でふれあい、ともに生きるまちづくり（健康・福祉）

1 地域の課題

全国的に、地域社会のコミュニティの崩壊が叫ばれていますが、少子高齢社会が到来する中で、地域におけるまとまり・つながりを育んでいくことは、ますます大切な課題になってきています。また、個人情報の保護に配慮することによって、情報の共有など、支え合いの基盤を維持することも難しくなっています。このように、生活様式が多様化し、地域社会の役割を維持・充実させていくことが難しい時代であっても、住民一人ひとりの持つ温かい心が重なり合い、広がるよう地域での支え合い・助け合いの仕組みづくりに取り組んでいく必要があります。



「地域」は、家族や家庭の次に、地域における基本的なまとまり・つながりとなる単位です。地域で共に暮らす者同士、日頃から連携・連絡などを保つことが必要ですが、核家族化、一人暮らし世帯の増加などにより、まとまり・つながりを維持していくことが難しい時代になってきています。

いくの地域の座談会においても、隣近所の気軽な助け合い、日常的な安否確認、見守りなど、昔であれば比較的容易に行われていた日常的なまとまり・つながりがなくなり、そのような機能や役割を重視する意見が多く挙がっています。

2 目標・将来像

健康でふれあい、ともに生きるまちづくり

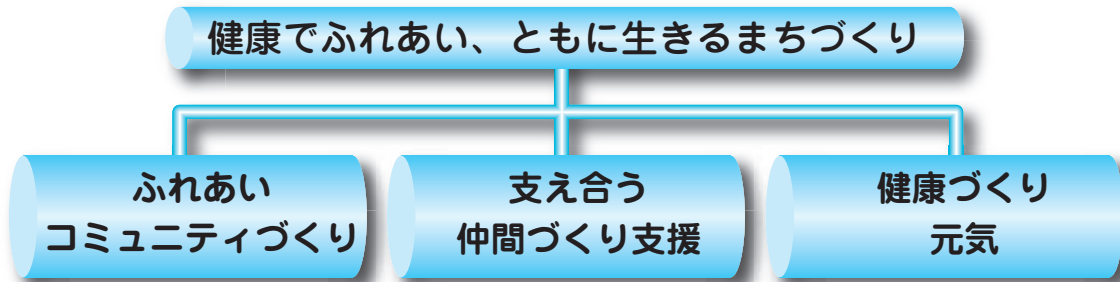
地域福祉や支え合い・助け合いという言葉は、決して強制されるものではなく、地域住民一人ひとりの心が源となって広がっていくべきものです。目指す方向性は共有しながらも、一人ひとりが自らの目線で地域社会の一員として、楽しく、いきいきと、生きがいを持って暮らしていくことが大切です。



その意味では、福祉や助け合いといった視点にとどまらず、地域における楽しみや生きがいの機会そのものを増やしていく、という発想がより重視されるべきであり、交流が活発に行われることが、お互いを知り、思いやりの心を持つための第一歩になると考えられます。

地域座談会においても、「人と地域とのつながり」を意識した意見が多く挙がっています。何かを始めるきっかけは、ふれ合うこと…、そんな気軽な動機や、きっかけが多くある地域を目指していくことが大切です。

事業の体系図



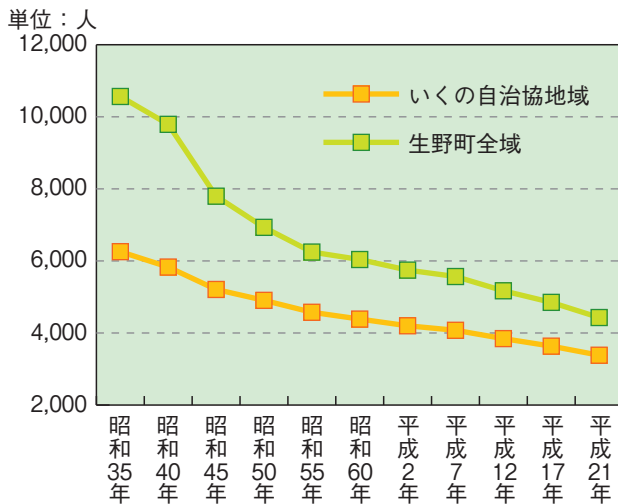
3 施策・事業

ふれあいコミュニティづくり



普段の生活に問題の少ない健常者にとってはあまり気にならないことであっても、高齢者や障害者などにとっては、生活の不便や孤独感など、様々な問題、悩みを抱えていることが少なくありません。こうした意識の差は、時として互いの無関心につながり、お互いの気持ちますます離れていってしまうことが心配されます。

地域座談会においては、高齢者や障害者などが、地域で共にいきいきと暮らすためには、交流の場の不足、地域における理解の不足、根強い偏見などを解消する必要があるとの声が挙がっています。少子高齢化がますます進む中で、支え合い・助け合いの社会を構築していくためには、地道にお互いの立場を知り、理解し、認め合うことが大切ですので、そのための活動や環境づくりに取り組んでいきます。



いくの地域の人口推移



ふれあい敬老会

支え合う仲間づくり支援

核家族化が進み、伝統的な家庭が失われつつある現在、高齢者家庭、子育て家庭、障害者家庭など、生活上の問題を抱える家庭が増加しています。このような人達を支援するため、地域住民や社会福祉に関する活動を行う者などが互いに連携して活動していきます。

現在、いくの地域においては、様々なボランティア活動が行われています。個人の自発的な意思によって活動するボランティアは、少子高齢社会においては、とりわけ大切な人材であり、地域社会を支える担い手でありま。自らの活動意欲・意思を尊重し、今後もボランティア人材の発掘・育成、既存のボランティア組織との連携などを進めていきます。

地域座談会で出された意見を反映し、経験や知識を持っている人材を地域で把握し、その人材を活かす仕組みや、地域での支え合い・助け合いを気軽に行える仕組みをつくっていきます。



健康づくり元気

健康は、すべての人にとっての願いであり、地域のまちづくりにおいても大きなテーマのひとつです。しかしながら、高齢化が進み、食生活が豊かになり、生活様式が多様化する現代社会では、生活習慣病が増加し、健康を維持していくことが難しくなりつつあります。福祉や医療など、いざと言う時の支援体制を整えることは大切ですが、自分の健康は、自ら守り、つくるという自覚を持つことも大切です。



ヘルスサポート事業



地域座談会においては、介護予防につながる健康づくり活動などへの関心の高まりを反映して、健康は地域で守るべきものという意見も出されるなど、地域としての関わりが重要視されています。

少子高齢社会に対応するために、地域住民一人ひとりが心身ともに健やかに暮らすことを支援していきます。生きがいを持っていきいきと暮らし、働くことが、地域の活力源となることから、地域福祉を推進するためにも、こうした視点で取り組んでいきます。

第2章 やさしさが集まるまちづくり(生涯学習・子育て支援・男女共同参画)

1 地域の課題

私たちのまち生野は、古くから銀山のまちとして、また但馬と播磨の接点として、特色ある文化を形成してきました。

しかしながら時代とともに、わたしたちを取り巻く環境は大きく変わりつつあります。人々の価値観やライフスタイルは多様化し、少子高齢化の進展と相まって定住人口も減少し続けています。



甲社宅周辺

そのため、歴史とともに築き上げてきた伝統文化を保存・継承し、地域資源を再認識する必要があります。

さらに、地域に暮らす私たちが、鉾山町独特の町並みや歴史遺産に対する理解をより深めていくことが求められています。また、地域ぐるみで子育てを支援する環境づくりなど人口減少や本格的な少子高齢社会を見据えた新たな取り組みが重要な課題となっています。また、地域住民が健やかに、明るく活気に満ち、一人ひとりが地域を支え合う地域社会形成が望まれています。

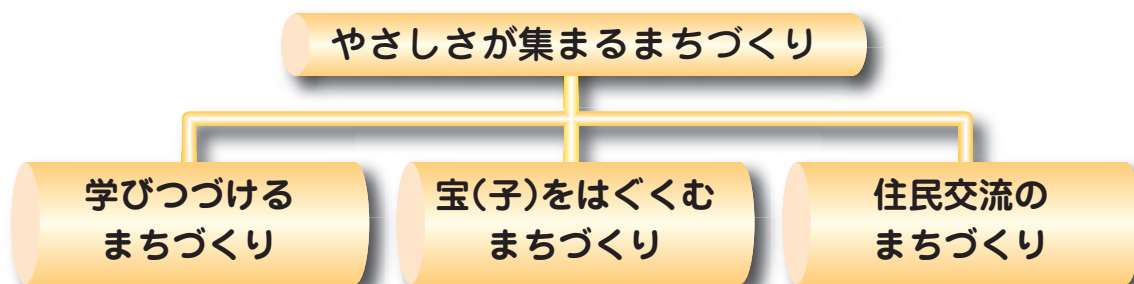
2 目標・将来像

やさしさが集まるまちづくり

私たちが地域の魅力を再認識し、次世代の子どもたちへ伝えていきます。

さらに、地域で子どもたちを育み、安心して子育てのできる環境を創出するとともに、世代間交流を通じて、地域に誇りが持てるようにしていきます。

事業の体系図



3 施策・事業

学びつづけるまちづくり



イベント「わが町を知ろう」の風景

私たちの地域に受け継がれた歴史遺産や伝統を共有財産として保存に努めるために、一人ひとりが学習の目的を認識し、意欲に目覚めるような啓発活動を推進していきます。

「わが町を知ろう」などを通じて、地域の歴史遺産を知り、地域の魅力を再発見するとともに、世代間の交流を図ります。また、子どもたちから地域への愛着と誇りが持てるようなふるさと教育の推進に努めます。

宝(子)をはぐくむまちづくり

地域で子どもたちを育み、安心して子育てできる環境を地域全体で支援していくことが求められています。

絵本の読み聞かせ会などを通じて、地域ぐるみで育てていく事業を展開するとともに、家庭内で眠っている不用となった子育て用品を必要な家庭に提供していく、子育て支援リサイクルバザーを開催していきます。

さらに、これからの地域を支えていくことになる子どもたちのために、家庭・学校・地域社会の連携を図りつつ、地域全体で子どもたちの健全育成に努めるための事業を展開していきます。

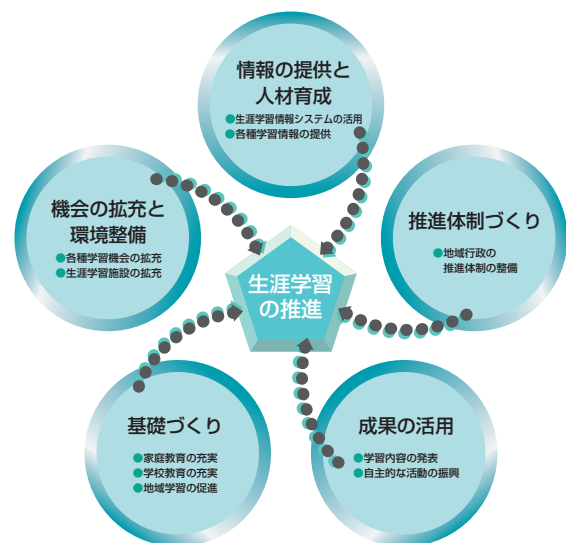


住民交流のまちづくり

地域の人々が相互の交流と理解を深めるための交流の場づくりをめざしていく必要があります。

日ごろ困っていることを気楽に話し合える場づくりなど、男女共同参画を促す仲間づくりに繋がっていきます。

また、若い世代が地域に入り、参加できる場を設定するなど、若者の活動を支援する仕組みを検討し、若い世代における地域への愛着心を醸成するための事業を展開していきます。



生涯学習の推進概念

第3章 水と緑のきれいな分水嶺のまちづくり（環境）

① 地域の課題

私たちのまち生野は、産業城下町として生野鉱山とともに発展し、現在も半導体産業など鉱工業のまちとしての営みを続けています。

公害を克服し豊かな自然環境を取り戻してきた生野として、環境に対する積極的な取り組みは欠かすことのできない重要な課題です。

これからのまちづくりは、産業生活文化の蓄積である歴史環境や自然環境などとの調和を図りながら、地域全体の個性と魅力をより一層高めていくことが求められています。

さらに分水嶺のまち、水源地のまちとして、特別天然記念物オオサンショウウオの生息する市川や円山川、生野高原など魅力資源の活用や、自然環境の保全と活用などが求められています。

また、地球温暖化による影響は深刻な状況になっており、地球環境に配慮してCO₂削減に向けて住民一人ひとりができることをしっかりと考え、分別収集や資源ごみ回収の徹底、エコバッグ運動の推進やバザーの開催による不用品交換やリサイクルの推進などが重要になっています。

地域のゆとりと潤いある環境づくりも重要な課題であり、緑化活動や花いっぱい運動の推進によって自分の家のまわりや生野の玄関となるゾーンについてもきれいにしていく必要があります。

さらに、観光交流やまちづくりに向けて、水辺施設の充実により安らぎの空間づくりを進めていく必要があります。



口銀谷の全景

② 目標・将来像

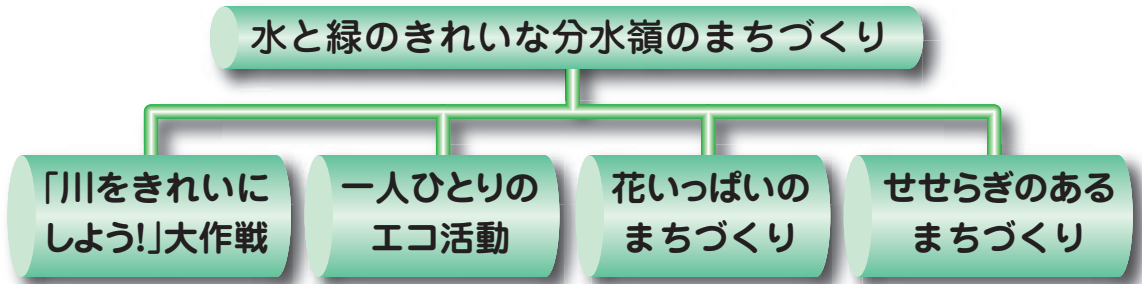
水と緑のきれいな分水嶺のまちづくり

分水嶺のまちとして、公害を克服し豊かな自然環境を取り戻してきた生野としての責任のもと、市川や円山川などの豊かな環境資源を次の世代に引き継いでいく暮らしを進め、いつまでも住み続けられるような潤いのある快適な環境をつくり上げていきます。



三菱マテリアル(株)生野事業所周辺

事業の体系図



3 施策・事業

「川をきれいにしよう!」大作戦

源流のまち・生野としての誇りを持ちながら、市川及び円山川の流域をきれいにする清掃や草刈りを、いくの地域自治協議会の会員が主体となって子供たちと一緒に取り組み、美しい流域を取り戻していきます。



市川の清流

すでに、地域や地元企業、住民グループなどによって積極的なボランティア活動による清掃作業などが進められていることから、こうした活動と連携しながら大きな輪になっていくように進めていくとともに、将来的には、奥銀谷地域自治協議会などとも連携しながら事業を展開していきます。

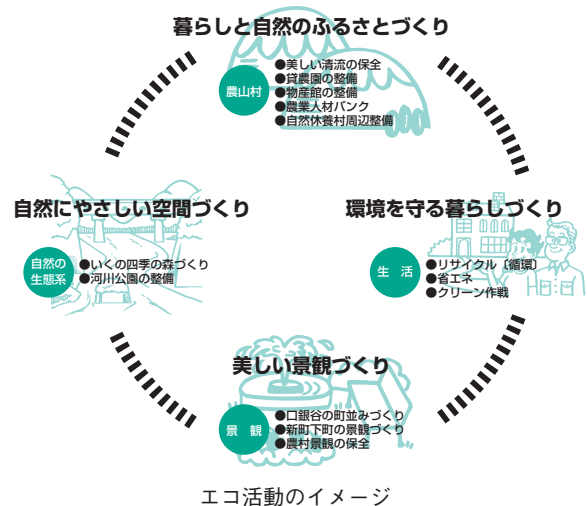
さらに、河川にゴミなどを投棄しないような啓発活動も展開していきます。

一人ひとりのエコ活動

公害を克服し豊かな自然環境を取り戻してきた生野として、住民一人ひとりの小さな努力をみんなで評価する仕組みをつくり、活動の輪を地域全体に広げていきます。

省エネや節水に心がけ、過剰包装をなくすエコバックの持参運動や環境に配慮した暮らしに向けて、一人ひとりが努力を重ねていきます。

特に、エコバッグ運動については地元商店やスーパーマーケットなどの理解と協力を得ながら進



めていき、半導体製造など最先端技術のまちとして、男性も積極的に取り組んで全国に情報発信していきます。

花いっぱいのもちづくり

公害を克服することによって周辺の緑を甦らせてきた生野として、「朝来市の花」でもある桜を植樹し、みんなで維持管理していくことによって緑化のシンボルとし、将来的に生野における桜の名所として育てていきます。



「生野の玄関」である生野真弓峠の国道312号沿いにある藤棚などをきれいに花で飾るとともに、播但連絡道路から生野へ入る交差点や生野新橋周辺なども、生野の玄関と位置付けてプランターを設置して花で飾り、みんなで維持管理を進めていきます。

モデル的に数か所のエリアを設定して、プランターの貸与や花苗・肥料などの供給支援を実施し、すでに活動を行っている住民グループなどと歩調を合わせながら、年次的に花いっぱい運動の輪をいくの地域全体に拡大させていきます。

せせらぎのあるまちづくり

下水道の整備によって生活環境が良くなってきた一方で、5区甲社宅周辺のように側溝や用水路に流れる水量が減少し、雑草やゴミなどが目立つようになってきました。

そこで、口銀谷地域において、観光客が歩く町並み散策ルート上の用水路や側溝を使い、周辺住民や水利組合などの協力を得ながら、せせらぎに、コイなどが泳ぐような潤い空間をモデル的に作って維持管理し、町並みを生かした観光まちづくりにも役立てていきます。



せせらぎづくりのイメージ

第4章 「みんなおいで！」のまちづくり（地域活性化）

① 地域の課題

私たちのまち生野は、生野銀山の風情を色濃く残す町並みや鉱山産業遺産群などの歴史文化の特性を生かした整備が進み、生野を訪れる人も年々多くなっている中で、来訪者へのおもてなしの充実を図ることが求められています。

今では近代化遺産の評価が高まり、地域資源を活かした活性化や観光交流イベントが各種団体等により開催されており、各団体との連携や活動を継続していくための一層の支援が求められています。

また、地域内に空家・空き地が目立つようになり、これの有効利用を図るための情報提供が求められています。

さらに、地域の特産品としての銀製品については、銀の馬車道プロジェクトから新たな商品が開発されており、そのブランド化や販売拡大を図るとともに、新しい特産品の研究・開発を進めていく必要があります。



生野銀山開坑1200年事業 ふれあいテント村

② 目標・将来像

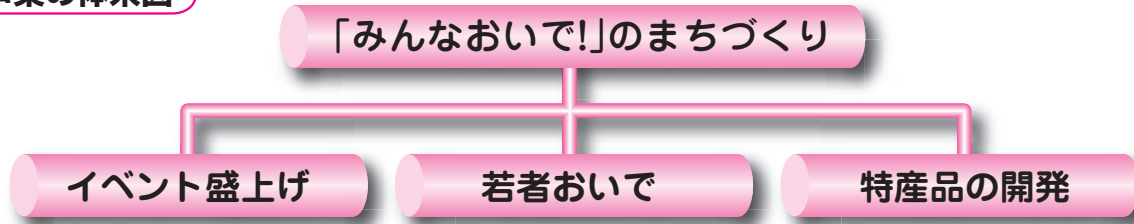
「みんなおいで！」のまちづくり

住民団体などが、風情ある町並みや近代化遺産群などの地域資源を活かした様々なイベントを展開しているなかで、いくの地域が目指すまちづくりの目標に向かって活動を継続・発展させていくために、各種団体との連携を図ることが重要であり、こうした活動をいくの地域の全住民が理解し、積極的に参加してもらえる環境をつくり上げていきます。



生野イルミネーションロード

事業の体系図



3 施策・事業

イベント盛上げ

銀谷祭りのメインブースとなる「鉾山食堂」の運営支援をいくの地域自治協議会が引き継ぎ、調理・スタッフ・食材・資材などを確保し、安定的な運営を支援し将来的には自立した運営に持っていく予定です。

また、「生野夏物語」の側面からの支援を行っていきます。

さらに各種団体等が開催している各種イベントの運営支援を行うことなどにより、来訪者と地域の人たちとの交流を深め、交流人口の増加に努めていきます。



銀谷祭り 鉾山食堂

若者おいで



地域に点在する空家・空地の活性化及び有効活用を図るため、UターンやIターンを促すための生活や地域情報と一体となった情報を広く提供するシステムを確立していきます。そして、新しく住んだ人に積極的な支援策を講じていきます。

また、若い人に定住してもらうように誰もが気楽に参加できる場づくりに努めていきます。

特産品の開発

落ち着いた町並みなど鉾山町独特の風景や生野鉾山産業遺産群が広がり、これらを活かした地域イメージの銀製品など銀に着目したまちの活性化に繋がる特産品を売り出すシステムを確立していきます。

また、郷土料理のだんじの関連品の開発や新たな特産品の開発も進めていきます。



ハヤシライス

第5章 あんぜん・あんしんなまちづくり（防犯・防災）

1 地域の課題

私たちのまち生野は、生野鉾山の繁栄に支えられ、多くの住民が住み、豊かな暮らしが営まれていましたが、生野鉾山の閉山を契機に雇用の場が減少し、急激な過疎のまちとなりました。このため、工業団地の造成や企業誘致、住宅団地造成販売などが行われましたが、大幅な人口の減少の歯止めとはならず、少子高齢化のまちとなっています。近年多発している、高齢者への不法販売や振り込め詐欺、児童・生徒・女性等への変質行為などの犯罪が身近でも発生しており犯罪を防止する取り組みが求められています。

また、異常な気象による自然災害が全国各地で頻発し、多くの人命や財産が失われています。平成21年8月には、市内各地、特に旧朝来町で異常出水により大きな被害を受け、災害に襲われる可能性が非常に大きくなっています。災害時の対応策や緊急時への備えが求められています。

犯罪や災害に対する備えは、行政にのみ頼るのではなく、あんぜん・あんしんに暮らせるまちを自分たちの手でつくるために、住民の自主的な活動が強く求められています。



平成21年8月台風による被害（葛蒲沢）

2 目標・将来像

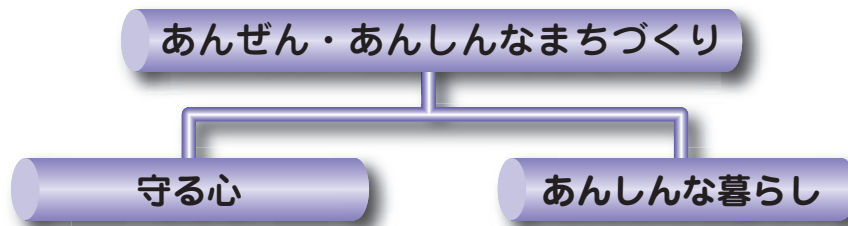
あんぜん・あんしんなまちづくり

住民や地域が連携した活動を行い、犯罪の防止や災害などに備え、あんぜん・あんしんに暮し住み続けるまちをつくり上げていきます。



通学路パトロール

事業の体系図



3 施策・事業

守る心

犯罪を未然に防止し、住民があんぜんに暮らし、子供たちが安心して学び遊べるまちにするために、地区や各種団体、住民に積極的に参加を呼びかけ、組織化を図り、青色回転灯車両を活用した防犯パトロールを行っていきます。学校やPTA、警察等と連携し変質者への対応訓練や交通安全教室を行うなど、犯罪や災害を受ける側の備えを行います。



青色回転灯車両による防犯パトロール

災害時の高齢者や弱者の支援、避難誘導等を円滑に行うためには、支援を必要とする人を明確にし、情報を共有する必要がある、その名簿の作成や更新を行うとともに、地域や住民相互のコミュニケーションが重要であることから、地域の助け合いネットワークを確立しコミュニティを創出します。

あんしんな暮らし

災害や緊急時には、地区（地域住民、自主防災組織）、消防団、各種団体等が連携した活動を行い、対応することが、必要不可欠です。この各種団体の活動を強化し、連携を深めることを進めていきます。また、



普通救命講習会

災害や緊急時に対しては、住民個々の防災知識の習得や適切な行動が不可欠です。このため、災害や緊急時の避難訓練や普通救命講習（AED）を定期的に関催し、知識や対応策の習得を図ると共に、あんしんマップの更新を行いAEDの設置個所や消防施設、避難所、通学路等の周知を図ります。



あんしんマップ

第6章 計画の実現に向けて

まちづくりは、行政と住民と企業・事業者がそれぞれ連携し合って進めていくものです。

以前は、行政や専門家の提案で総合計画やまちづくり計画が進められていましたが、これからはどちらが提案する側でもされる側でもなく、お互いに提案し合い考え合って、それぞれが受身でなく、協働によってまちづくりを進めていくことが私たちの役割です。

私たち「いくの地域自治協議会」は、地域住民や企業・事業者などによって構成されており、さらにNPOや子ども会、各種団体なども積極的に



まちづくり計画策定特別部会

まちづくりに加わっていくことが求められています。

このまちづくり計画は、こうした多くの地域住民の参画を得て意見を集約させながら自らの目標として策定しましたので、計画の実現に向けても自分たちで確実に行動し繋いで次へ引き継いでいく必要があります。

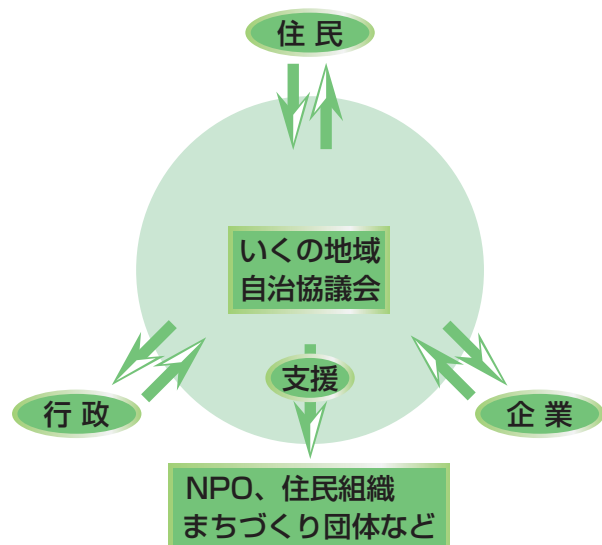
そして、この計画は概ね10年という長期間に及ぶものですし、多くの地域住民が関係して計画の実現に向けて進められるものであり、今後はPLAN（計画づくり）→DO（実行）→CHECK（点検・評価）→ACTION（修正・改善）という計画実現のサイクルを毎年継続させ、より精度の高いまちづくりを進めていく必要があります。



いくの地域では10年以上前から様々な機会に住民参加のワークショップが進められ、他の地域以上に熟度の高い参画と協働のまちづくりが展開されてきました。かつて、生野鉦山が全国の模範鉦山として発展してきたように、いくの地域自治協議会も他の模範となるようなまちづくりを展開していくことが求められています。

私たちのまちづくりに終わりはなく、際限なく続いていくものです。

ともに手を携えて、「ロマンあふれ かがやくまち 生野」の実現を目指して頑張っていきましょう。



協働のまちづくりのイメージ

参考資料など

いくの地域まちづくり計画 策定経過				
平成21年	7月	28日	地域まちづくり出前講座	運営委員会メンバーを中心に地域まちづくり計画の意義、策定方法等の説明を受けた。
	8月	28日	第4回運営委員会	いくの地域まちづくり計画の策定に向けた特別部会を設置することを確認し、特別部会メンバーは各区から3～4名を人選することとした。
	9月	6日	自治協だより第6号発行	まちづくり計画策定の勉強会をしたこと、計画の意義、作り方を掲載した。
		18日	第5回運営委員会	地域まちづくり計画の策定スケジュールを協議し、H22年10月に計画をまとめることとなった。
	10月	27日	第6回運営委員会	特別部会メンバーとして43名が承認され、第一回特別部会は11月10日に開催することとした。
	11月	2日	三役打ち合わせ	まちづくり計画は、H22年度定期総会で承認を得るため、策定スケジュールを前倒しすることで決定した。
		6日	自治協だより第7号発行	地域まちづくり計画策定の作業手順を掲載した。
		10日	第1回特別部会	地域まちづくり出前講座として市担当職員による地域まちづくり計画の意義、策定方法の説明を受けた後、支所職員による地域の現状、協議会部会会員によるの活動等の説明を受けた。
		16日	三役打ち合わせ	
		24日	第7回運営委員会	特別部会には運営委員会委員も参加し、情報の共有を図ることとなった。また、特別部会にアドバイザーを招き、円滑な進行を図ることとした。さらに、まちづくり計画を、H22年度の総会までに完成させることで承認された。
		30日	第2回特別部会	木原氏が部会長に就任し、H19年に整理したいいくの地域の課題について見直しを行い、重要性、緊急性の振り分けを行った。
	12月	15日	特別部会打ち合わせ	
		17日	第3回特別部会	アドバイザーの足立裕美子氏紹介ののち、前回の作業をまとめた「結果シート」を確認し、新しい事業や活動について話し合った。
	平成22年	1月	7日	自治協だより第8号発行
18日			支援職員特別部会打ち合わせ 三役打ち合わせ	
21日			第4回特別部会	前回までの作業結果を再確認し、理解した上で分野ごとの目標をまとめた。
2月		5日	支援職員特別部会打ち合わせ	
		15日	特別部会打ち合わせ	
3月		29日	第5回特別部会	出来上がった地域まちづくり計画（たたき台）を確認・検討し、キャッチフレーズを決定した。
			第6回特別部会	総会に提案する最終案を確認し、H22年度からの具体的な活動について検討した。

いくの地域まちづくり計画策定 協力者等名簿

まちづくり計画策定特別部会

今井 直一	梶本 貞由
谷川 晃	小谷 要
高橋 勲	小山 好昭
井上 利夫	青石 安雄
村崎 清三	斉藤 明美
佐古 昭	上野 弘美
萩野喜代一	水本 俊幸
足立 亘	小島 茂幸
若木 里司	渡辺 秋広
関 一己	日下 康信
中井 武四	岡田 好郎
安井 裕治	木原 真一
花田 慎一	前田 吉幸
栗屋 勝之	小田 正儀
中村 八郎	佐子 芳明
藤原 進	日下部謙一
足立 正成	上田 繁
小牧 昌子	杉本 英治
楠 勤子	小松 茂樹
足立喜八郎	馬場 政江
松下 文雄	山野 純子
藤原 伸彦	

運営委員ほか

羽瀨 正勝	杉本 廣美
足立 克行	宇治 紘三
坂本 薫	小川 幸夫
松本 定之	米野 彰生
藤原 欣伸	木下三千雄
藤本 直	松本 忍
清水 隆夫	桑田 孝史
永田 修平	足立 稔
日下 義忠	宮崎 隆史
山木 葉末	森脇ますみ
海崎 陽一	坂本 和昭
夜久盛三郎	藤原 栄治
竹村 諒司	小牧 征男
小路 陽司	竹村 睦美
大城 保	

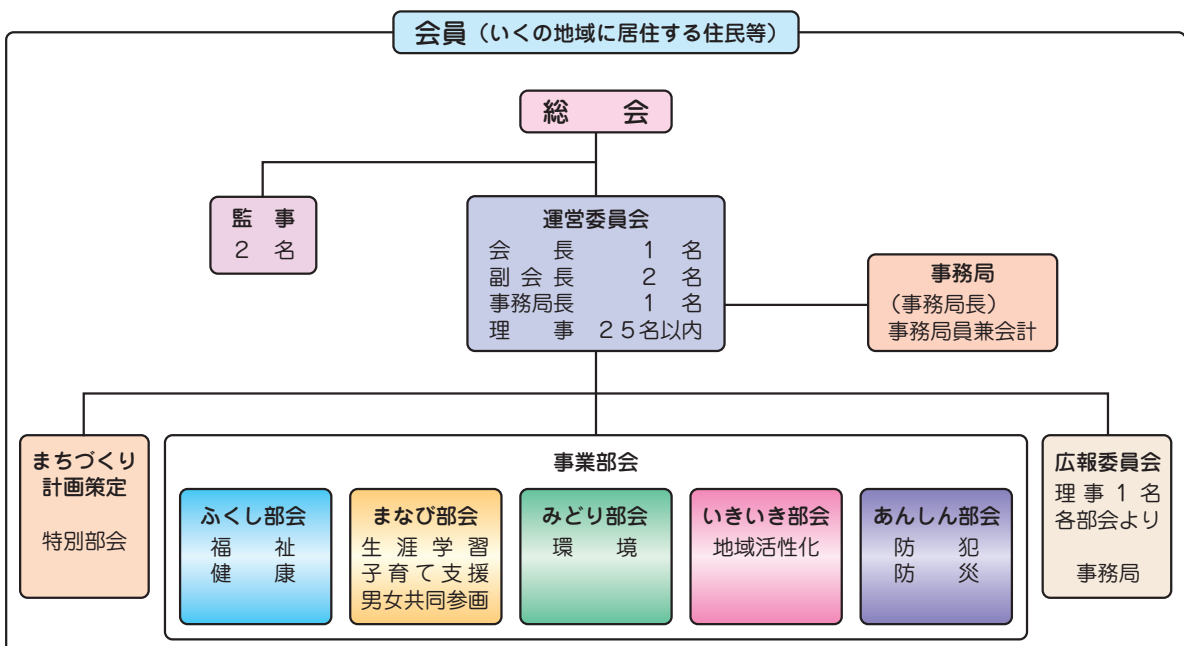
順不同、敬称略



アドバイザー

足立裕美子

いくの地域自治協議会 組織図



～ ロマンあふれ かがやくまち 生野 ～ 施策体系図

